

ミエナイチカラ

奨励	寒河江 健【さがえ・けん】
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」彼らは、これに対して答えることができなかった。

(ルカによる福音書 14章1―6節)

イエスが招かれた理由とは

イエスが、ファリサイ派と呼ばれる人の家に食事に招かれるシーンが今日の聖書では語られています。しかし、なぜファリサイ派の人はイエスを招いたのでしょうか。理由は続く箇所ですぐに明らかになります。イエスがファリサイ派の人の家に入ると、目の前に水腫を患っている人がいました。そこでイエスは、律法の専門家やファリサイ派の人びとに言います、「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と。ここで重要な言葉が二つ出てきました。安息日、そして律法という言葉です。この二つの言葉が非常に大事な意味をもってきます。この安息日と律法こそが、ファリサイ派の人がイエスを自宅へと招いた理由と関係してきます。

まずは、律法というものを簡単に説明します。律法とは、この当時のユダヤ人が大切にしていた教えです。ファリサイ派の人びと、そして彼らと結びついていた律法学者は特に、この律法を厳しく守っていた人びとでした。その律法のなかでも、最も重要な教えがモーセの十戒です。「殺すな。姦淫するな。盗むな。・・・」といった有名な教えが記されています。この十戒の中に、安息日のことが書かれています。申命記第5章に書かれた記述を見ると、「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」とあります。十戒にはこのように、「安息日にはいかなる仕事もしてはならない」とはっきり記されています。ファリサイ派の人びとがイエスを招いた理由はズバリ、この安息日に、水腫の人を癒すという行為をするのか、つまり律法違反をするか試すためでした。

イエスのリアクション

イエスは自らの目の前にいる水腫の人を見て、ファリサイ派の人びとの意図を瞬時に察したのでしょうか。彼らに、「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」という言葉を投げかけます。ファリサイ派の人びとは黙っていました。イエスがどんな行動に出るのか、もしもイエスが律法違反をしたならば、責め立ててやろうという思いを心に巡らせながら黙っていたのでしょうか。すると、イエスは水腫の人の手を取り、病気を治してお帰しになりました。そして間髪入れずこう言いました。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と。イエスを試した人びとは、このイエスの問いに対して答えることができませんでした。イエスを非難してやろうと思った彼らは、この言葉にハッとさせられました。イエスは、「あなたの大切な人が、助けを求めているら、あなたは助けるだろう。あなたの大切な人に対する愛が、なぜ今目の前で、病気に苦しむ隣人のためには働かないのだ」と、彼らに問いかけたのです。

「ミエナイチカラ」の正体

皆さんは「あなたを忘れない」という映画をご存知ですか。この映画は、2001年1月26日に東京の新大久保駅で起きた人身死亡事故を題材にして作られた映画です。事故の概要は、泥酔した男性がプラットフォームから線路に転落し、その男性を救助しようとして線路に降りた日本人カメラマンと韓国青年の計3人が電車にはねられ、死亡したというものです。この事故は発生当時、ホームに落ちた人を命がけて助けようとしたという美談も相まって、マスコミに大々的に取り上げられました。この事故をうけて、電車の非常停止装置や線路内の緊急避難場所の整備といった安全管理体制へと波及していきました。この事故では、救助に向かった二人は、線路に落ちた方と知り合いではありません。全く見ず知らずの人のために、彼らは自らの命を投げ出してまで助けようとしてました。私たちもおそらく、自分にとって大切な人が線路に落ちたなら、直ちに線路に降りて助けに向かうでしょう。しかし、電車が到着する音が鳴り響くホームで、見ず知らずの人が線路に落ちたとき、私たちは助けに行くことはできるのでしょうか。

私たちにとって本当に大切な人が困っているとき、助けを求めているとき、自らの労を惜みせず、損得を考えずに行動することができます。大切な人のために自らの利益を顧みず、行動する原動力はどこからくるのでしょうか。大切な人が線路に落ちたとき、電車の音が聞こえようが、線路へと降りるように私たちを押し出す力はどこからくるのでしょうか。私は、それは自らの力や意志で降りられるのではないと思います。人間の中、人間の内から生まれ、出てくる力に、そのような見返りを求めない、無償の力はないと思っています。私たちがそういった無償の行為ができるのは、ある対象を心から大切だと思うときに、私たちの外からやってきて働く「ミエナイチカラ」です。その力は私たちを自らの身を削る行為へと押し出すのです。そしてその力を、私たちは「愛」と呼ぶのです。

愛は、すべてを完成させるきずな

イエスという人物は、水腫という病に苦しんで生活する人を目の前にしたとき、その人を本当に大切に思い、愛に押し出されて水腫の人を癒しました。それはまさに、律法の本質的な教えに基づくものでした。律法の本質とは、神を愛し、隣人を愛することです。だから律法を正しく守るなら、隣人を愛してはいけない日などはないのです。律法の本質を見失っていたファリサイ派の人びとにとって、イエスの言葉は鋭く彼らの胸に突き刺さりました。イエスに対して、答える言葉がありませんでした。

私たちは、大切な人が井戸に落ちたとき、「ミエナイチカラ=愛」に押し出されてその人を助けられるでしょう。しかし、その愛を隣人にも同様に発揮できるでしょうか。イエスの教えとは、その大切な人に働く愛が、隣人に対して発揮する生き方、人間のあり方でありました。イエスという人物はそのような生き方をしていきました。

2001年1月26日に東京の新大久保駅で起きた事故では、韓国の留学生が見ず知らずの日本人のために命を賭してまで助けようとしてました。この事故の後、日本人のなかに根強くあった韓国人に対する差別や偏見が薄まっていったのは事実です。翌年に日韓共催のワールドカップが開催されたことも相まって、日韓関係は現在、以前よりも急速に改善しつつあります。命を賭した韓国人留学生の隣人に対する愛は、韓国と日本の間の「きずな」として確かに残されました。今学期のチャペル・アワーの統一テーマは、「愛は、すべてを完成させるきずなです」という聖書の言葉です。他者のために無償で働く愛は、さまざまな事柄を完成させるきずなとなるのです。

同志社で学ぶ・働く者として

私たちは、隣人のために、「ミエナイチカラ」に押し出される生き方を歩いていくことができるでしょうか。偶然隣に居合わせた人のことを、自らの大切な人のように思うことができるでしょうか。同志社の校祖・新島襄も「人一人ハ大切ナリ」と語っています。新島は、出会う隣人一人ひとりを大切にする生き方を歩みました。偶然近くにいる隣人を、私たちが最も大切に思う人のように大切に思えるか。キリスト教精神に基づいた同志社で学ぶ、あるいは働く者として、キリスト教を信じる、信じないにかかわらず、心の中にもちたい問いです。